

かしわ

夏休み中のろう学校の様子①

校長 北村耕一

7月25日(月)から夏休みが始まりました。31日間(土日祝日を含む)の夏休み、ろう学校の様子は?と思われている保護者もいることと思います。子どもは「夏休み」ですが、教職員は夏季休暇や有給休暇以外は学校に勤務しています。(月～金の8:15～16:45)

また、授業の指導力を高めるために、市教育委員会、県教育委員会主催の校外での研修に参加して学んでもいます。教職員の中には土日祝日に行われている民間の研修に自ら研修費を支払って参加している者もいます。

さらに会議のための出張もありますし、昨年度の私のように関東聾学校体育連盟のバレーボール・軟式野球・卓球の各大会の運営に携わっている者もいます(合計10日)。

また、中学部・高等部の教職員は、学習指導、部活動の指導で出勤してきている者もいます。

まだ始まったばかりですが、今年のろう学校の夏休みの様子のほんの一部を紹介したいと思います。

7月26日(火)幼稚部登校日 & 通級指導担当者研修会

7月26日の午前中に幼稚部の登校日がありました。

教室で朝の会を行った後に、視聴覚室で魚釣りや輪投げのゲームを行いました。ゲームを楽しんだ後に、教室でフワクワやかき氷を食べて夏休みの登校日を満喫しました。

午後には横須賀市内の3校の難聴・言語の通級指導教室の担当者の研修会が本校で行われました。共通の検討事項と3校の担当者からの情報交換、本校のSTからの提案の後に横須賀市教育委員会支援教育課の久保田指導主事から指導助言をいただきました。



No. 7 平成28年7月27日 幼稚部の朝顔

※ 遅くなりましたが、7月の学校行事と6月の世界選手権の様子をお伝えします。

7月7日 全校授業研修会

総括教諭 渡邊 豊

7月7日(木)、宮前先生による、中学部1年の社会科の「全校授業研究会」(略称:全校研)が行われました。全校研は、教師の指導力向上を目的とし、一人の教師の授業を全員が見て、研究テーマに沿った話し合いをするものです。本校の今年度の研究テーマは、「考える力を育てる授業の工夫」です。授業後の二人の感想を紹介します。

先生:『沢山の先生に見てもらえる授業も良いものです。生徒もいつになく真剣で緊張もしていましたが、最後まで頑張っていた生徒を褒めてあげたいです。』生徒:『社会の授業の時、視線が気になってドキドキしました。とても疲れました。』

宮前先生は授業で「スペインの暮らしや習慣」を扱われましたが、人々の生活を理解させ、考えさせるために、色々な工夫や様々な資料を準備されており、とても参考になりました。研究協議会でも活発な意見交換が行われ、とても有意義なものとなりました。



7月8日 校内芸術鑑賞

教諭 小澤 菜摘

横須賀ろう学校で働くことが決まってから、毎週日曜日にNHKみんなの手話を見るのが日課になりました。善岡さんが劇団に所属していることは知っていましたが、まさかデパパペットアターひとみの方だとは知らず、驚異と感激で胸がいっぱいになりました。

今回デフパペットシアターひとみさんが公演してくださったのは、家族三世帯の物語を箱で表現する「BOWES じいちゃんのカゴール」でした。物語は、少女がプレゼントされたカゴールから始まりますが、少年と少女のやりとりがとても面白く、声を出して笑ってしまいました。

声を出して笑っていたと思うと、突然悲しい出来事が起きたり、初めは少年と少女だった二人が大人になり子どもを産み、またその子どもが大人になり子どもを産み、声を一切出さず、箱と動き、表情だけで「笑い」「涙」「ぬくもり」を感じ取ることができる劇をみることで、心が浄化された気持ちになりました。



第3回世界ろう者陸上選手権大会に

出場して学んだこと

教諭 竹花 康太郎

6月25日からブルガリア開かれた第3回世界ろう者陸上競技選手権大会に棒高跳びで出場し、3位になり銅メダルを獲得することができました。

私は、世界選手権大会の第1回大会から出場しており、3回目の出場になります。しかし、今大会の記録は決して満足いくものではありませんでした。

試合中、想定外の豪雨が降り、ポール(棒)が曲がる時に滑るのではないかという不安を抱えながら試合を進行していました。メカ面でもう少し強ければ、メダルの色もかわっていたかもしれません。外人選手との差(敗因)はメカ面でした。

でも、今回もメダルを獲得できたのは、幼児児童生徒の皆さんと保護者の皆様、そして先生方の応援があったからだと思っています。試合前のコールの時に子ども達の顔を思い浮かべ、この子ども達のためにも頑張らなきゃと胸を張って、会場に向かいました。



私が学んだことをいくつか書いていきたいと思いません。この大会は、自分の種目でいい記録を残すことを目標にしている選手がほとんどだと思いますが、私の場合、他の外国人選手とコミュニケーションをとりながら、親睦を深めていくことも重要なことだと思って大会期間を過ごしました。世界で嫌な事件が日々起きている中、日本人としての良い印象をもってもらうためにも、積極的に英語や国際手話を使ってコミュニケーションをとるよう努めました。その時に気をつけることは、相手または相手の国を尊重する気持ちをもつことです。尊重する気持ちをもちながら話をしていくと、徐々に本音を話してくれるようになり、国の状況や大変さを教えてくれました。それぞれの国の情報を得ることができ、たいへん勉強になりました。改めて世界共通語の英語の力はすごいものだと思います。更に勉強して、英語力を身に付けていかなければならないと感じました。

また大会期間中、トルコ空港でテロがあったため、無事に帰国できるかが心配でした。問題なく日本に到着した時は安堵感でいっぱいでした。情報やニュースをこまめにチェックしていないと、何かあった時に対応ができなくなり、自分の命を守れなくなってしまうことを身をもって感じました。

【ブルガリアと日本と比較して違うところ】

気温は日本と比べて、ブルガリアのほうが高いが、湿度が低くカラッとしているため日陰だと外でもさほど暑くありませんでした。パスタやパン料理が中心の食事でした。毎日同じようなものを食べていると、食生活がかわり、大会前に体調を崩しやすくなることに気配り、日本から非常食品のアルファ米をもって行って、1日に1回は食べるように心がけていました。トイレに行った時、驚いたことがあります。ヨーロッパは、トレットペーパーを便器に流すのではなく、ゴミ箱に捨てるという習慣があるそうです。

次回は2017年にトルコで開かれるデフリンピック大会に向けて、子ども達とともにまた頑張りたいと思っております。(小松先生のお話は第8号に掲載する予定です)